

青鳳会 足底筋膜炎の鍼灸治療

平成二十八年九月二十五日 青鳳会

講師 吉野 久

1. 緒 言

9年前に、足底痛に対する鍼灸治療」と題して同様の発表を行なったが、それ以降も、しばしばこの症状を訴える患者は相次いだので、治療の上でも、鍼灸古典の知識の上でも、新しい知見が多々あった。そこで、あらためて話をさせていただこうと考えた次第である。

とくに今回は、技術の上で巨刺と繆刺を取り上げるが、素問の、この刺法を扱う篇をあらためて読んでみると、思わぬ発見があつて興味深かった。

また、足底筋膜炎を起す患者のなかには、けつこうな確率で手掌の筋膜炎をおこす患者があり、これも興味深いことである。

この足底・手掌筋膜炎の治療法は、当然のことながら相通じるものがあるので、この治療法を知ることが、鍼灸の治療家にとって重要と思われる。

2. 足底筋膜炎について

私の臨床経験から述べるが、足底筋膜に痛みを生ずる原因は、概略以下の三つに絞られる。

- ① 経年性の足のアーチの崩れに起因するもの
- ② 精神ストレスによるもの
- ③ 踵骨足底部、あるいは中足骨前端節の足底部にできる骨棘に起因するもの

このうち、①、②にたいして、鍼灸治療が効著である。

3. 鍼灸医学的考察

◆巨刺

素問・調經論第六十二

身形に痛み有り九候に病莫ければ則ちこれを繆刺す。痛み左に在りて、右脈病むは、これを巨刺す。

ここでいう「九候」や「脈」とは、素問・三部九候論でいう九候の脈拍部のことで、一箇所だけ脈拍の小さい、大きいなどの箇所をさす。

「獨小者病、獨大者病、獨疾者病、獨遲者病、獨熱者病、獨寒者病、獨陷下者病」〔素・三部九候論〕

靈樞・官鍼第七

人に曰く巨刺、巨刺とは、左は右に取り、右は左に取る。

楊上善…以って左右の大經を刺す、故に巨刺と曰う。巨は大なり。

森立之…巨刺は巨大の義にして善し(これは楊注に対しての言)、而して嘗て私かにこれを考うるに、巨は恐らく互の譌りなりて、また繆と同じく交差の謂いならん。「脩閭氏掌比、國中宿、互標者※。與其國粥、而比其追胥者、而賞罰之」※〔周礼・秋官〕 司農注「巨を當に互に爲したり」これその證なり。下文に曰う「この如きは必ず巨刺せよ」の巨字は互字の訛(あやまり)たり。證せり證せり。

※ 素問攷注に引いてあるのはここまでで、以下の周礼の文字は筆者による補足。

※※ 「脩閭氏掌比は、國中(城中)の宿の、巨体の守衛だった。城中の人々に粥をふるまい、また盗人を捕らえては罰した」

標 タク 拍子木、拍子木をうつ。転じて守衛。

【字解】

巨キヨ さしがね、おおきい 矩形の定規をあらわす象形。



巨…金文

互ゴ たがう、たがいにする 縄巻きの器の象形。



互

◆ 繆刺

素問・繆刺論第六十三

黄帝問曰、余聞繆刺未得其意、何謂繆刺。

岐伯對曰夫邪之客於形也、必先舍於皮毛留而不去、

入舍於孫脈留而不去、入舍於絡脈留而不去、

入舍於經脈、内連五藏、散於腸胃、陰陽俱感、五藏乃傷、

此邪之從皮毛而入、極於五藏之次也。如此則治其經。

今邪客於皮毛、入舍於孫絡留而不去、閉塞不通、

不得入於經、流溢於大絡而生奇病也。

夫邪之客大絡者左注右、右注左、上下左右與經相干而布於四末、其氣無常處、不入於經俞、命曰繆刺。

帝曰願聞繆刺、以左取右、以右取左、奈何。其與巨刺、何以別之。

歧伯曰邪客於經、左盛則右病、右盛則左病、

亦有移易者 **甲乙・病易且移**、左痛未已而右脈先病、

如此者必巨刺之、必中其經、非絡脈也。

故絡病者其痛與經脈繆處、故命曰繆刺。

帝曰願聞繆刺奈何、取之何如。

歧伯曰邪客於 **※※**足少陰之絡、令人卒心痛暴脹、胸脅支滿、

無積者刺然骨之前、出血如 **すなわち**食頃而已。

不已、左取右、右取左。病新發者取五日已。

邪客於手少陽之絡、令人喉痺、舌卷、口乾、心煩、臂外廉痛、手不及頭、刺手中指次指爪甲上去端如韭葉、**※各一蛟**、壯者立已、老者有頃已、左取右右取左、此新病數日已。

邪客於足厥陰之絡、令人卒疝暴痛、刺足大指爪甲上與肉交者、**※各一蛟**、男子立已、女子有頃已、左取右右取左。

※※邪客於足太陽之絡、令人頭項肩痛、刺足小指爪甲上與肉交者、**※各一蛟**、立已、**不已**刺外踝下三蛟、左取右右取左、如 **すなわち**食頃已。

※ **【森】**案ずるに「各」と曰うは、左手を用いるの時、右手を用いるの時、並じて各（みな、ひとしく）同じく「一■」（イ やまいだれ十有）の義なり。

※※ ここにおいて示されている刺法とは、井穴瀉穴を巨刺で行う方法である。が、足少陰之絡に関してだけは、「然谷の前を刺せ。治らなければ左は右を取り、右は左を取れ」とあって、どこを巨刺するのか述べていない。足太陽之絡の例を鑑みるに、足少陰之絡もまず井穴である涌泉の瀉穴を巨刺で行ない、治らなければ然谷をまた巨刺せよ、というのが本来の条文だったと考えられる。

繆字解

繆ビユウ 「説文」■ジン 女へん十任あさの十■ケツ 潔のサンズイを取
るたばなり。一に曰く綯(たばねる)繆なり。繆死||絞死

繆刺とは、縛って静脈を浮かせて刺絡する意味合いが強いのではないか。

森立之は「差繆」という語を用いて、左右を交差して刺す意を強調している。

「案、繆刺巨刺相似而殊、…蓋共左右差謬而於絡、謂之繆刺、在經云之巨刺」

病の侵襲

繆刺論では邪の侵襲について具体的に論じているが、同様の侵襲のしかたを説いているのは、素問の調經論と皮部論である。靈樞の百病始生では、これさらに発展させた論を展開している。

病の侵襲1：皮膚↓孫脈↓絡脈↓經脈 「調經論・繆刺論・皮部論」

病の侵襲2：須理↓絡脈↓經↓輸(輸穴)↓伏衝の脈(衝脈)↓腸胃↓五藏

〔靈・百病始生〕

素・生氣通天論・標本病伝論

また、經脈に入った邪を正病といい、絡脈に入ったものを奇病と呼んでいるが、經脈に入れずに、絡脈に溢れてしまう病という考え方は、素問と難經に共通している。難經では、ここから奇経を生み出していった。

- ・ 今邪客於皮毛、入舍於孫絡留而不去、閉塞不通、不得入於經、流溢於大絡而生奇病也。夫邪之客大絡者左注右、右注左、上下左右與經相干而布於四末、
- ・ 其氣無常處、不入於經俞、命曰繆刺。〔素・繆刺論〕
- ・ 其病在奇邪之脈、則繆刺之。〔素・三部九候論〕
- ・ 然、聖人圖設溝渠、通利水道、以備。不然、天雨降下、溝渠溢滿、當此之時、劑滯妄行、聖人不能復圖也。此絡脈滿溢、諸經不能復拘也。〔二十七難〕

◆その他

靈樞・終始第九

從腰以上者、手太陰陽明主之。從腰以下者、足太陰陽明主之。✳。病

在上者下取之、病在下者高取之。病在頭者取之足、病在腰者取之臑

※※。病生于頭者頭重、生于手者臂重、生于足者足重。治病者、先刺其病所從生者也。

※ 楊上善：腰以上爲天、肺主天氣、故手太陰手陽明主之也。腰以下爲地、脾主地土、故足太陰足陽明主之也。

※ 張介賓：此近取之法也。↓類經①：近取之法の變形

※ 馬蒔：遠取之法也

甲乙經・鍼道終始 ……靈樞とほぼ同文

從腰以上者、手太陰陽明主之。從腰以下者、足太陰陽明主之。病在下者高取之、病在上者下取之。病在頭者取之足、病在腰者取之臍。病生于頭者頭重、生于手者臂重、生于足者足重。治病者先刺其病所從生者也。

類經・五十三 刺諸病諸痛

刺諸痛者其脉皆實。故曰從腰以上者、手太陰陽明皆主之。從腰以下者、足太陰陽明皆主之。病在上者下取之、病在下者高取之。病在頭者取之足、病在腰者取之臍。（此遠取之法也。有病在上而脈通於下者、當取於下。病在下而脈通於上者、當取於上。故在頭者取之足、在腰者取之臍）病生于頭者頭重、生于手者臂重、生于足者足重。治病者先刺其病所從生者也（先刺所從生。必求其本也）。

疾高而內者取之陰之陵泉、疾高而外者取之陽之陵泉、

陰有陽疾者取之下陵三里①、正往無殆、氣下乃止、不下復始也。

4. 治療

○三陰交・懸鐘の陰陽通刺法

○四指間に対する刺法を、健側に対して行う(繆刺法)

これは、患側の手甲に行なつても、同様の効果が得られる。

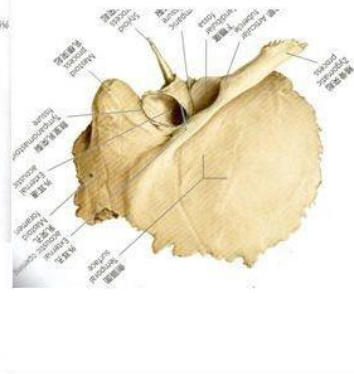
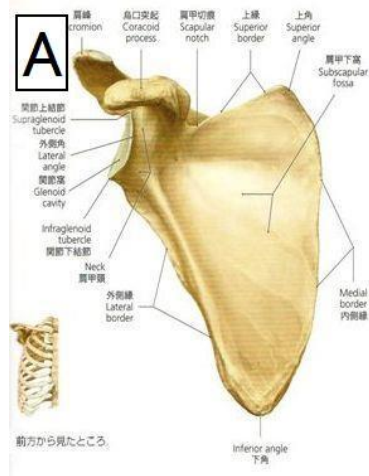
付・骨格に現れる原型と、巨刺あるいは互刺

ここまで、巨刺・互刺、あるいは繆刺という左右を交差して刺す刺法について見てきたが、実際に臨床にたずさわっていると、素問や靈樞の教示をうけるまでもなく、箇所を反対側に鍼をすれば痛みが止まるのではないか、という予感のようなものがあることは、否めないのではないだろうか。

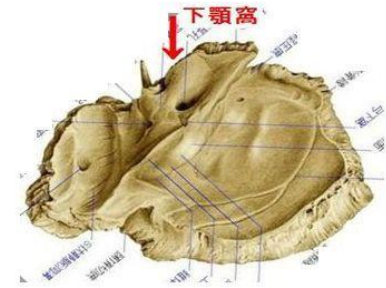
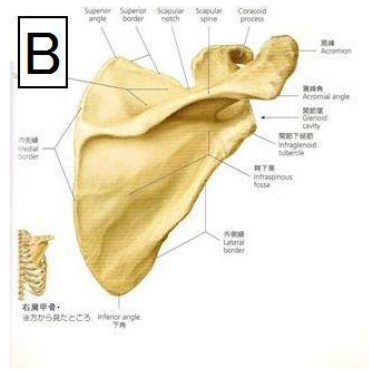
ひるがえって言えば、反対側に治療をして治すというのは、私は素問や靈樞よりも古い考えなのではないかと思う。「上なるものは下なるものの如し」というのは、先の靈樞・終始にあるのと同様の考え方だが、これは『ヘルメス文書』にある一文だそうである。『ヘルメス文書』とはエジプト、ギリシアの太古から伝わる知恵をまとめた書物だということ、私としては後日、当たってみる他ないのだが、このなかには恐らく、「大なるものは小なるものの如し」や「右なるものは…」といった条文もあることだろう。

この類の条文は老子や荘子、それに連なる淮南子、呂氏春秋といった古典書にあるのではないかと期待して探してみたが、不思議なことに見つからなかった。

さて、ここに示した図はL・F・C・メースというオランダの解剖学者が『シユタイナー医学原論』という著書のなかで述べている説にもとづいて作ったものだが、一目して人間の肩甲骨と寛骨、側頭骨が同じような構造を持っていることに気づくだろう。

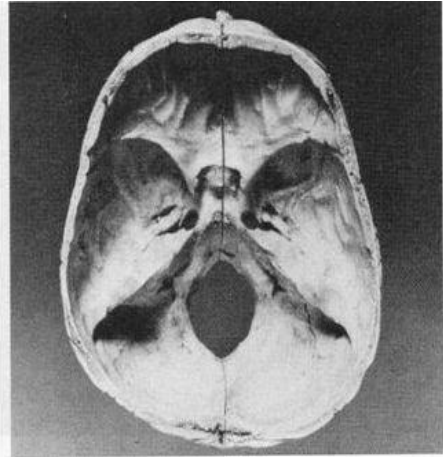


△ 人間の肩甲骨(右・内側)、寛骨という骨盤の骨(右・外側・上下逆)、側頭骨(外側・回転させてある)



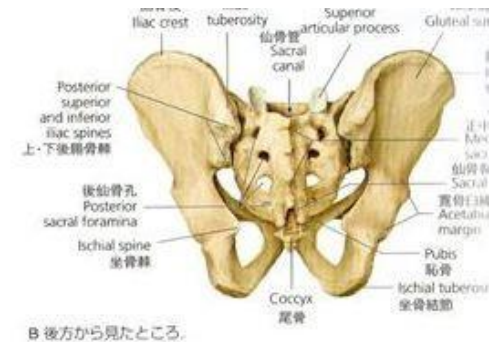
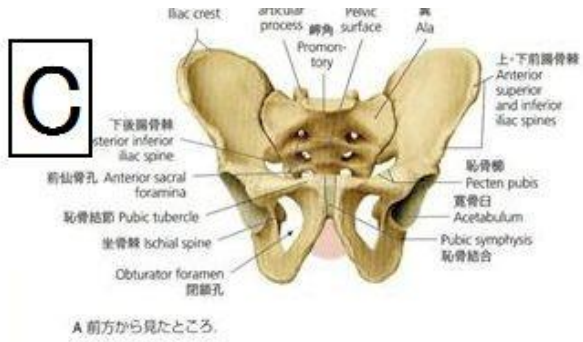
B 逆側から見たところ

D



D 頭蓋底

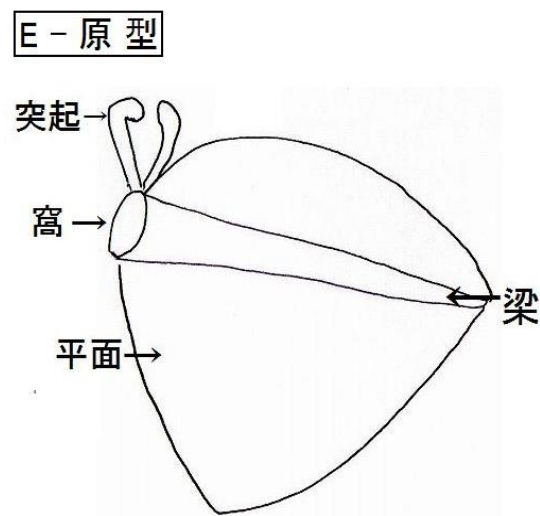
C



C 骨盤の全体と頭蓋のなかにある蝶形骨



E 原型



AとBで分るのは、いずれも頑丈な梁(はり)の先端に窩(くぼみ)があり、梁が平面で支えられていることである。窩の付近には臑が付きやすいように、大きな突起が円を描くようになり、側頭骨ではこの突起は閉じて外耳道になっている。C、Dで明確なのは、頭蓋と腰にあらわれる蝶のモチーフである。

A、Bには、ひとつの原型があり(E)、C、Dには蝶のかたちの原型があらわれている。腕、下肢の骨、肋骨の原型は、捻じれた棒状で、その両端に節があるというものである。

人間の骨格とは、こうしたいくつかの原型をもとに構成され、各原型はそれぞれの場所で都合のいいように細部の形状や向きを変えて、仕事をしていると言える。

体が、いくつかの原型とそのメタモルフオーゼによって構成されているものである以上、右の痛みが左で治ったり、頭の痛みが足で治ったりという理屈は、われわれにとって自明の理であるように思えるのである。

蝶のモチーフのことを考えれば、頭の奥深くの病気を、腰で治療できるのではないか、という予想が成り立つ。実際に、わが国の江戸時代の畜獣にたいする鍼法書を見ると、仙骨の上に百会穴をとっている例があるのである。